
東方幻実神

Erius

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幻実神

【Zコード】

Z0414Z

【作者名】

Errius

【あらすじ】

交通事故で死んだ主人公。しかし、その魂は創造神の元に。ありきたりなことと独自設定が多いかと思うので、苦手な方は逃げてください。／＼現在総書き直し作業中です。話の根本を変えたつもりはありませんが、大分別の話になつるので注意。

第一話・世界神の誕生（前書き）

皆さん始めまして。

簡単にですが、いくつか注意をば。

まず、この作品はもともとオリジナル作品の予定だったことです。
要するに、独自設定がすごいです。

次に、これが初作品です。一応書き直しではありますが、初作品です。

多少の粗末な文章、意味不明な点は見逃してくださいとありがたいです。

では、どうぞ。一話でも読んでくださいありがとうございます。

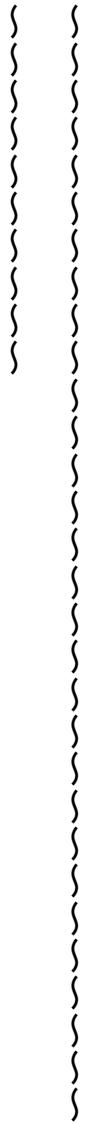
第一話・世界神の誕生

不運にも交通事故で亡くなつた一人の男がいた。

特に出来ないこともなく、しかし完璧にできる物は無い、平均的な男だった。

彼の魂は偶然か必然か、幸か不幸か、世界を司る創造神の元へ流れ着いた。

これは、そんな彼の非常識に満ち溢れる物語。



……ここは一体どこなのだろうか？

何もなく、真っ白の様でも真っ黒の様でもある不気味な空間だ。

しかもよく考えれば、感覚が全く無い。

あるはずの腕、足、頭……どれも、無い様に感じる。

もしかして、本当に無くて、この光景も見えているわけではないのだろうか。

「おや……珍しいね」

声が聞こえるような気がする。あるかないか分からぬ今、全てが曖昧だ。

「なんだ……？」

俺が何か喋った気がする。

「喋れるのかい？」

「しゃべ……れる……？」

喋ったような……いや、喋った！

俺は今確実に喋った！

それを認識した時、全ての感覚が戻ってきた。
見えるし、動かせる！

俺の目には確かに自分が映り、目の前には男がいた。
周りは真っ白で何もない。

「……驚いたよ、まさか魂なのに実体化するとはね」

ファンタジー物によく出る神のよつて白い衣装を纏っているその男
は、驚いたよつて叫んでいた。

「なあ、リリはめじーだ？」

だが俺はそれを気にせず、思つたことを口にする。

……後から思えば、放心状態だったのだらう。

「……こんなのは初めてだよ。特別に、教えようかな」

「どういふと一呼吸置き、説明し始めた。

「ソレは連結空間、何もない場所だ。しかし、全ての世界はソレの空間に繋がっている。

全てのために無くてはならない場所だよ。そして、創造神の僕の”仕事場”もある」

「どういふ意味だ?」「

「僕の仕事は、君みたいな珍しくソレに迷い込んだ魂をどうかするのが一つ。

全ての世界を管理して、新しく創つたり消したりするのが一つだ。最も、君みたいなのはあんまりないから実質仕事は一つだけね。」

「うーん……」

「ああ、全て理解しようとしなくていいさ。多分無理だからね。それに、もしかしたら後で理解できるかもしないし」

意味が、よく分からぬ。
掴めたのは大まかなことだけだ。

「さて、これから選択をしてもらおう。……喋れない魂しかいなかつたからちやんと選択させるのは初めてだよ。」

「選択？」

「……やつだ。……君には、2つの選択肢がある。
まず一つ、このまま本来行くべきだった場所へ行く。君たちはあの世へ言つたつけ？

もつひとつ、新しく創った世界の神を務める。丁度今創らつとしているところだよ。

正直に言えば、人手不足なんだよね。いくら世界が増えても、管理できるのは僕だけだからね」

「……創らなければいいんじゃ？」

「残念ながらそもそも行かないのさ。確かに、誰かに命令されてるわけでもなければ、

強制的に創らされてるわけでもない。でも、やらなきゃいけないんだよ。」 そうなつてゐる“からね”

「……わからん」

「まあ、そんな話は置いといて。選択を頼むよ」

ぶつかけ、こんな選択肢出されたら選ぶの決まつてると黙つてみだ
よな。
もひりん……

「その選択肢なら、俺は後者を選ぶ」

「…………うん、わかった。準備を始めるから、ちよつと待つてくれ

俺は座つて待つこととする。

ところで……何故俺はこんな状況でりながら考えられるんだ？

普通なら考えるのをやめてもおかしくない状況なのに。

死んだから？ 関係ないだろう。そんなことは微塵も考えていないかった。

まあ、考えて分かるようなことでも無なしだし……

「……よし、これで終わりだ」

向こうも終わったみたいだし。

「ああそりそり、君にまのの本を渡しておけ。役に立たないとせること思つかひ。

……それじゃあ、あそこへ行つてくれ

「ソレか？」

「セレでいい。……最後に、名前を聞いてもいいかい？」

「応条順時おうじゅんじだ。どうせそもそも使わなこと思つがな……」

「それじゃあ、ありがとう、応条順時。生憎僕には名前が無いんだけれどね。

またいつか会えたうれしい

「やうかい」

やうかい言つてゐるうち、俺は光に包まれ始めた。
正直なところ、これからどうなるのかさっぱりわからないし、
こいつの言ったこともよく分からぬ。

だけじゃあ……

「できるだけ、楽しむとしますかね」

そう言い残し、俺は消えた。

さて……どうするかなあ。

周りは木一つ無い果てしない草原。地面が無ければ、やつきの場所とあんまり変わらないな……

そもそも、俺はどうすればいいのだろうか。
確か世界の神とか言われた気がするが……

ん?……ふむ。

適当な場所に移動、地面を引っ張るイメージで……

「それっ!..」

ドゴーン!

「うぐっ!」

な、なんだ……力が入らな……

起きると、朝だった。

”今は太陽が沈んで出てきた時”と頭に浮かぶので、多分一日経つたのだろう。

しかし、昨日のはなんだったのだろうか？

本能的にと言うか、感覚でやっただけなのだが、……

目の前に馬鹿でかい山が出来るし。

うーん……ああそうだ、本。

基礎的なことぐらには、書いてあるだろ？

能力について

この世界で能力とは、人によって持つてたり持つてなかつたりする固有の物だよ。

世界の頂点に位置する君なら確實に持つてるとは思うけどね。それもすごい物を。

とりあえず、田を瞑つて能力と念じればいい。名前だけは分かるから。

何が出来るかは、やりたいことをイメージしつつ力を込めればいい。手なんかを使ってやるとイメージしやすいと思う。

最初のページ。こんな物もあるのか……完全にファンタジーだな。今の俺の存在が既にファンタジーだから今更だけど。

田を瞑つて……集中。

『現実と幻想を操る程度の能力』

……本当に名前しか分からない。」

いや、待て。この感覚は、さっきのと似てるな……

もしかして、この山も能力で創ったのか？

……神っぽく何でもできる物だったりして。ただし、力は半端なく使つとか。

いろいろ試した結果、その通りだつた。力を半端無く使つことまで含めて。

5つ試そつと思つて7日もかかるとは思わなかつた。

とつあえず、読書しよう。もう倒れるのは嫌だ……

そういえば、俺以外に誰もいないのだろうか？

世界の始まりだし居なくてもおかしくはないが、世界が違うからといつて特別に何か違うことはないらしい。

つまり、日本神話とかが実在する可能性も無いわけではない。最も、神話なんぞほとんど知らないのだが……まあ、暇になつたら何かしてみよう。

後は、取りあえず住処だな。草の床で寝るのも慣れてきたが、やっぱり何か欲しい。

とは言つても、何もないのだが……と、そういえば目の前に山があつたな。

穴でもぶち開けて住むか。力も人間だったときに比べて物凄い強くなつてるみたいだし。

つてことで。

「そいつ！」

ドコッ！

……ふむ。確かにこれは強い。人が入れる程度の洞穴が作れるとは。でも、よく考えたら置く物ないな。木があればいいのだが……しきうがない、創るか。

木を一本創りだす。何の木かは分からないが、繁殖してもらおう。その時間さえ耐えれば、何となる。その間気についていろいろやつてみるか。

第一話・世界神の誕生（後書き）

言葉にかなり悩みました……もつといろんな言葉知らないと黙りで
すね、はい。

一行書くのに10分悩むとかありました。これはまずい。

第一話・話し相手を求めた一億年目（前書き）

日本神話入りします。一億年ぶつ飛ばします。原作キャラ出ます。

第一話・話し相手を求めた一億年目

木を創りだしてからおよそ100年経った。

木は20本程になつた。早いのか遅いのかわからぬが……

寿命が無いも同然だからだらうか。この100年は長じゆうにも短いようにも感じる。

もう人じやないなあと今更なことを考えながら、修行する。修行とは、氣と能力の修行だ。

氣は使えば増える。使い方も分かつてきた。

能力は使えば慣れる。ただし、氣を使うので増えないと倒れるのは仕方ない。

今はまだ増やすときだろうが、もう少ししたら頭に浮かんでいる気の使い方をやってみようと思つ。

……とは言つものの、ずっと同じことをやつてるので暇になる。なので、前に言つたように誰か居ないか探しに行こう。

やはり100年程度ではほとんど変わらない。この間にか山の近くに湖が出来ていたときは驚いたが、と、歩いていたところで。

「貴方は誰?」

いつの間にか後ろに誰かいた。

「……俺は……」

応条順時と言いかけて、止める。

「これは前の世界での名前だ。

「刃勇流英だ」

なので、ふつと頭に浮かんだ名前を言ひ。

「わい。私はアマテラス。イリ高天原を治めてこりのよ」

アマテラス、と言ひと……

「天照大御神？」

「わいとも呼ばれてるわね。貴方は何をしこきたの？」

「探索だ。俺はあっちの方に住んでるんだが、誰も居ないから暇なんだ」

「そりなの。でも、ここも私以外誰もいないから暇な物よ？」

「俺としては話せただけでうれしこよ」

……ん？

「おい、誰か来るぞ？」

「……ッ、まさか」

遠くに、誰かがこちらに向かつて歩いて来ているのが見える。

「「！」を奪いにきたのかしら？…だとしたら……」

「いや、待て。敵意は無さそうだぞ？」

「なんだん近づいてきてるが、敵意を全く感じない。

「何か構えてるわけでもないし……」

「……本当ね。治めるつゝに重く感じていたのかしらね」

「……ついことで警戒をやめ、待つ。
やがて田の前に来ると……」

「あら、スサノオじゃないの」

「やあ、アマテラス。そちらの方は？」

「刃勇流英だ」

「！」の人はさつき来たのよ

「そうか」

と、口に来て微笑みつつ。

「初めてまして、僕はスサノオと言ひ。アマテラスとは兄妹だ。僕が弟だけね。

もう一人、ツクヨミの兄が居るんだけど……どうに居るか分からぬんだ」

「ああ」

全部どこかで聞いたような名前だな……まあいいか。

「さて……僕はもう行くとするかな。ここに来たのは挨拶するためだし」

「あら、遠い所にでも行くのかしら?」

「『J答』。どことは言わないけどね。それじゃあ

そう言い、スサノオは去つていった。

「さて、俺も帰ろつかな。いつして話したのは久しぶりだ

「一気に寂しくなるわね」

「何を言つが。この時代で、何人も一緒に居る事自体が珍しいんだよ?」

「まあ、それもそうね。また会いましょう」

「ああ」

微笑むアマテラスに見送られつつ、俺は帰つていった。

とこう」とで着いた我が家。

隅には100年分の日記がある。

紙……とか白紙の本は、能力で創らせもらつた。修行目的に。この能力は便利すぎるのであまり利用したくないのが本音だが、

本なんぞ今から何年後出来るかわかったものじゃない、
ということで仕方なく。言い訳にしかならないが。

さて寝よう、いつの間にか日が暮れている。

能力の安定はいつのことやら。明日も明後日も、修行だな。

気がつけば1億年。果てしないと思っていても、意外とすぐに過ぎ
る物だな……

もちろん変化は大量にある。

作り出した木は枯れることなく成長し続け、大木になつた。
しかも、そこから広がつていつた木々は森と言つても良いぐらいに
広がつた。

火山が噴火したりして地形に凸凹ができたり、どこからか水が出て
きて川もできた。

人間どころか猿も居ないが、かなりの変化があつた。
悲しいのは、相変わらず話す相手が居ないことか。

もちろん俺自身にも変化はある。

気は増加したし能力も少しは安定してきたが、

一番は『術式』を開発できたことだ。

最初にアマテラスに会つた年の10年後ぐらいから開発に取り掛か
つていたのだが……

なんとか完成した。あとは、修行して安定させるのみだ。

この術式は気を精密に操つて式を作り、何らかの効果をもたらせるこ
とができる物だ。

式なので複雑な物は相当に精密で複雑になるが、その代わり成功す

れば安定する。

うまくやれば単純に気を使ってやるより消費が減るし、効率もよくなる。

もちろん難点は、難しさなのだが。

そういうえばあの後分かつたのだが、アマテラスが居た高天原は天界と呼ばれるところにあつたらしい。

で、俺が通ってきた道は天界と地上を繋ぐ道だつたらしい。
偶然にも程があるだろ？……

さて、これから神社を建てようと思つ。

何時までも洞穴はなんだか悲しいし、個人的に神つて言つと神社だし。

100年ほど前から計画はしていたので、準備は万端だ。
場所は、湖の近くだ。とは言つても山の近くの湖ではなく、別の場所の湖だ。

理由はいろいろあるのだが……今はいい。

建設完了！特に何も起こらなかつたので過程は割愛する。

本殿から鳥居まで建てておいた。人がいない今意味はないけど。
朽ちないよう保護の術式をかけてあるので、人が出る頃までもつ
てくれるるありがたいのだが……

荷物は日記のみ洞穴に置いてきた。封印付きで。

ぶつちやけ、多すぎるのだ。圧縮の術式をかけても一部屋潰す程度
にはある。

止める気はないが。書かないつもりでも無意識に書く程度には慣れ
てしまつたからな。

封印かけたのは、無くしてしまつのは惜しいからだ。

術式のテストも兼ねているが。だめなら、いずれ封印が自然消滅するか誰かに解かれるだろう。

出かけようか……と思つたが、日が暮れてきたので明日にしよう。

とまあ翌日。朝飯食つてさつと行こう。気になつて仕方が無いのだ。

今更だが、生活自体は人間の頃とほとんど変えないで過ごしている。世界になんかあつたりすると全力で取り掛かるので全然変わるが。

さて、やつてきたのは山の近くの湖。神社の近くじゃない方。結構気になることがあるのだが、何となく来れないでいたのだ。気になることとは、山に居てもわかるぐらの強さの氣を感じるのが一番大きい。

さて……何が出るのやら。

湖に近づいていくと、途端に何故か霧が深くなつてきた。ふむ……まあ、この程度なら見えないことも無い。
……と、なにやら人影が見えるが……

「誰か居るのか？」

呼ぶように言つと、驚いたようにビックリとした後、

「誰だー。こーはあたいの湖だよー。」

と言つた。

明らかに敵意を向けられているな……

「落ち着け、俺は怪しい者じゃない。とりあえず霧を晴らしてくれ、見えない」

「見えないのは仕方ないわね……特別に晴らしてあげるわー」

さあっと霧が晴れていき……

少女が現れた。

「妖精か……ん？ 妖精？」

妖精にしては、気の量が物凄く多い気がする。
その辺の森でも時々見かけるが、ここまで大きいのは見たことが無い。

「ぐつ、何と言われようがあたいは妖精よー！」

若干涙目になりつつ大声で言られた。一体何が……

「お、落ち着いてチルノちゃん？」

また何か現れた。やはり妖精のようだ。
こちらはこちらでなかなか強いな……

状況が把握できないのだが……何があつたのだらうへ。

「なあ、何が……」

「ああ、すいませんそこの方。

チルノちゃんの前で妖精に関しての話は控えてもうえるとありが
たいです……」

申し訳無さそうに頭を下げて言ってくる。

まあ、事情があるなら仕方がない。断る理由があるわけでもないしな。

「……ああ、わかった」

少し様子を伺つていると、やがてチルノと呼ばれた妖精が立ち直つたようだ。

そして……

「お前、結局何しに来たんだ？」

「何があるか見に来ただけだ」

「じゃああたいと勝負しなさい！」

「は？」

前後の文が繋がっていない気が……

「この状況で平然としてられるってことは強いんでしょう？あたいは最強になるんだから！」

うん、わからん。妖精の括りで言えば十分最強なのだが……
まあ、深く考えずに相手をしようか。

「わかった、いいだろ？一かかってこー！」

そして、がんばるつかな……

第一話・話し相手を求める一億年田（後書き）

アマテラスはいつかまた出てきます。 約分。
スサノオも出てくるかも。

第三話・実戦経験なんてあつません（前書き）

タイトル通り。先に言つておきますと、結構無理矢理に展開を引っ張りました。

第三話・実戦経験なんてありません

ふむ……

よく考えてみれば、俺は今武器なんぞ持つちやいない。ついでに、力と気はあるけれども実戦経験も無いに等しい。拳句、チルノは強い気を放つている。

あれ、負けてもおかしくないよなこれ……

チルノは氷を固めた棒……いびつだが剣か？それを構えている。対して、俺は素手だ。

能力を使ってもいいのだが、あまり時代に合わないものは出したくない。消費も激しいし。

「いくわよー」

そのかけ声と同時に、氷は俺の目の前まで来ていた。
……速い！

「チツ……せいつ！」

受け流しつつ、カウンターを入れる。

「ぐつ」

だが、その勢いで何回も斬りつけて来る。防ぎきるのは不可能だ。どちらかと言つと殴られてるのでスパッと切れたりしないのが幸いだが。

……打撃ならいけるか？

「……これだつー。」

ガンッ

「あつ」

手に気を込め、氷の剣を殴つて弾き飛ばした。
この隙を逃すほど馬鹿ではない。

「今度はこいつちの番だ！」

武術の心得はないので適当になつてしまつが、殴る。
回し蹴りからの回し蹴り。浮いたところに滑り込み殴り上げる。
後は……

「つ……これ以上させるか！凍れ！」

ガキン！

蹴りは、突然現れた氷により防がれる。
チルノはその隙に距離をとり、気を集めて……

「食らえ！パーカクトフリーズ！」

すると、チルノから弾幕が放たれる。
そして……弾幕が止まる。

「……？」

「今だ！アイシクルマシンガン！」

と、弾幕が動くと同時につららが凄い速さで迫る。

「つ……なかなかきついな……」

気を集めて盾にして、ダメ押しで即席術式結界を貼る。弾幕は弾かれていぐが、即席結界も壊れていぐ。

「まだ試してないけど……仕方ない」

俺は盾とは別に手に気を集め、形を形成し放つ。白のその弾丸は、いくつもゆっくりと進む。

「相殺弾丸！」

速度の遅いその弾丸は、チルノの弾丸やつらりに当たると同時に消し去った。

「何！？」

「終わらせるぞ！」

突破口を作り、チルノへ殴りをかます。

「ぐうっ」

「破壊の拳！」

ある程度破壊に特化した術式を拳にかけ、もう一発入れる。

「まだよつ……」

チルノは氷を創りだし、抵抗する。

だが、破壊に特化したこれを防ぐには力不足だった。

バキッ！

「がつ……」

チルノは吹っ飛んでいった。おそらく、もう戦闘不能だろ？

吹っ飛んだところでは、チルノが泣いていた。さっきのもう一人の緑髪の妖精もいた。

チルノの近くにしゃがみこむ。妖精は何も言わなかつた。

チルノは何か言つているが、正直なところさっぱりわからない。

「……チルノちゃんは」

と、そこまで黙っていた妖精が口を開く。

「チルノちゃんは、群れから追い出されたんですね」

「……へ？」

「もともと私達妖精は、非力で無知です。でも、チルノちゃんはそ

のどちらもあつた。

単純な思考の妖精が取る行動は簡単でした。追い出すことです。
お前は妖精などではない、と、何度も……っ」

この事実に、俺は黙つていることしか出来ない。

こんな状況で、なんて声をかけたらいののか、俺には分からぬ。

やがてまた話し始めた。

追い出された彼女は、力を求めた。
それは追い出した奴らに向けるための物ではなく、単純に最強を曰
指すため。

なぜそう思い至ったのか分からぬが、妖精として生きることを捨ててまで目指そうとした。

しかし、妖精だと言い張ることは絶対に諦めなかつた。彼女なりのプライドがあつたのだろう。

縁髪……大妖精と言づらしい。

彼女にもチルノの行動原理と考え方はほとんど分からぬが、支えになりたいということで付いていつてゐようつだ。

「……今更だけどさ、俺みたいな見知らぬ奴にそんな事言つちまつていいいのか?」

「いいんですよ。ただの自己満足ですけれどね。事情を知られて困ることもないですし」

ああなるほど、妖精を、群れを捨ててまで得よつとした『最強』を俺がへし折つたのか。

ならば、責任を取らなくてはな……

「なあチルノ

「……なによ

「俺の修行に付き合はないか?」

「……え?」

「まともに戦いをしたことの無い俺。でもその俺は勝ってしまった。
別に俺はお前に、俺が最強だと聞いて来たわけじゃないのにな
なうらば、手伝ひびいはしなければならないださう。

「……やるわ

「……ああ、わかった。いつか俺を、超えて見せてくれ

チルノは俺の修行に付き合つの決定。
後は……

「大妖精、お前はどうするんだ?」

「ついていくに決まってるじゃないですか。私はチルノちゃんを支
え続けるって決めたんですから

「……ああ、そうだ。ここを離れられるのか? 妖精は離れられない
と聞いたが……」

「私達を縛るものは、持った力で消えました。ですので、どうでもいいけます」

「なるほどな……じゃあ最後に。お前達は、妖精でいたいか?」

「「もちろん」」

「じゃあ、ちよっと待つててな」

根本的にいろいろするのは俺じゃ力不足だ。だが、力を抑えないとぐらいはできる。

2つのリボンに、複雑に術式を書き込んでいく。いつも時は能力に感謝したくなるな……

「……よじできた。頭にこれをつけな」

素直に、付け始める。チルノには青いリボン、大妖精には黄色いリボンを渡した。

と、みるみる力が抑えられて減っていく。

「俺の力じゃこの程度しか出来ないけどな……力ぐらいは、妖精になれてるんじゃないかな?」

「ありがとー!……でもこれじゃあ最強を目指せないよ?」

「外せばいい。でも、基本的に付けていれば、少なくとも妖精に見えるぞ。若干身長も縮んでるぞ?」

「え?……あ、たしかにあんたが大きく見える」

「まあ、それじゃあ家に帰るといよつ……つと、忘れてた」

自己紹介をしていない。

「俺は刃勇流英、ただの神だよ」

「いやしかし疲れたな……」

3人で家に帰ってきた。話し相手がいるつてこんなに素晴らしいことなんだなと思つたりもした。

「おーい、部屋は有り余ってるから好きな部屋使つていいぞー」

畳の上で転がりまわつてる2人に声をかける。
建設の時、必要な場所以外は全て空き部屋にしたので有り余つていいのだ。

何部屋か日記の保管場所にして潰しているが、それでも5部屋以上はある。

ここは宿か。神社だよ。

翌日。あの後、もう暗かつたので寝た。木炭に術式をかけて、それに火をつけたものぐらいしか光源がない。

もうそくでもあるといいんだがな……まあ、それはどうでもいい。

それより朝食だ。もちろん俺が作る。

「なにやつてるの~?」

と、においに誘われたのかチルノが来る。

「朝食作ってるんだ。大妖精はどうした？」

「いろんな場所見て回つてたよ」

「そりが。まあ、そのうち来るだらつ。……つと、もつねんやうで
きるわ」

献立は「飯に焼き魚、味噌汁だ。

味噌だけ自分で出したが、それ以外は全て自分で取つてきた物だ。
全部今の物だけでやううとするとただでさえ単調なのが余計にひど
くなる。

許してほしい。

木を削つて作つたちゃぶ台に配膳し終えた頃、大妖精が釣られたよ
うにやつてきた。

「……あ、そういうえばお前達箸なんて知らないか」

と、じつで重大なことに気がつく。今更である。

何とか教え、こんどは……

「「「いただきます」」

第三話・実戦経験なんてあつません（後書き）

チルノの理由が全然思いつかず、散々悩んだ挙句こんな出来に。
いつかいいのが思いつけば、編集しようと思います。
取りあえず今は最後のあたりがやりたかっただけと思つてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0414z/>

東方幻実神

2011年12月1日18時52分発行